

日本古典文学全集

和泉式部日記
紫式部日記
更級日記
讃岐典侍日記

校注・訳

藤岡忠美
中野幸一
犬養廉
石井文夫

小学館・刊

和泉式部日記 紫式部日記
更級日記 讃岐典侍日記

日本古典文学全集 18

1971年6月10日 初版発行 定価 2800円
1988年7月20日 第二十版発行 ISBN4-09-657018-4

校注・訳者 藤岡忠美
中野幸一
犬養廉
石井文夫

発行者 相賀徹夫
印刷所 大日本印刷株式会社
発行所 株式会社小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

振替口座 東京8-200番

編集 292-4763

電話(03)業務 230-5333

販売 230-5739

© T. Huzioka K. Nakano 1971 (著者検印は省略
K. Inukai H. Isii いたしました)

■造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。

■本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

目次

解 説

日記文学の形成……………秋 山 虔……………五

和泉式部日記……………藤 岡 忠 美……………一四

紫式部日記……………中 野 幸 一……………三

更 級 日 記……………大 養 廉……………四六

讃岐典侍日記……………石 井 文 夫……………五五

和泉式部日記

藤 岡 忠 美 校 注・訳

凡 例……………八

本 文……………五

校訂付記……………一五三

紫式部日記

中 野 幸 一 校 注・訳

凡 例 一五

本 文 一六

校訂付記 一六

登場人物一覽 一六

更 級 日 記

犬 養 廉 校注・訳

凡 例 二七

本 文 二八

讃岐典侍日記

石 井 文 夫 校注・訳

凡 例 三五

本 文 三六

校訂付記 四七

付 録

主要参考文献 四三

日記年表	四七九
圖錄	四九八
復元 紫式部日記絵巻	五〇五

口絵目次

紫式部日記絵巻	1	紫式部日記絵巻	8
和泉式部統集切	5	御物本更級日記	10
三条西家本和泉式部日記	6	石山寺縁起絵巻	12
黒川本紫式部日記	7	村井敬義奉納本讀岐典侍日記	14

日記文学の形成

秋 山 虔

一 日記文学以前

「日記文学」という語は、こう呼ばれるにふさわしい一群の作品に対して、近代の研究者の名づけた呼称であった。元来、日記は文学作品として書かれたものではない。それは本質的に記録なのであった。その点については、玉井幸助『日記文学概説』（昭和二〇）のごとき研究があつて、中国における日記、日本における日記なるものの精細な調査研究が報告されている。玉井によれば、中国において、日記は学者の研究記録と王者の言行記録との二源をもつて発生したが、それが分流し、合流し、諸種の記録形態が生ずるに至つたのであるという。そうした記録としての日記筆録の営為は、政治・文化の範型を中国に仰ぐほかなかつた日本においても変わることはなかつたであらう。

日本において、律令官制のとのいゆく情勢のなかで、当然、官府における日記の制も定められるのである。職員令なかつかさしろう中務省条によれば、内記ないきの職掌に、宮廷の記録の事が見える。いわゆる内記日記で、これは平安時代の末まで行なわれたらしい。なお、平安時代九世紀、嵯峨天皇さがの時代に、太政官だじょうかんの外記げきも行事儀礼を記録することになり、この外記日記は外記庁ふだのの文殿ふだのに保存されて、先例故格を考ふる典拠として重んじられたのである。また、藏人所くらうどどころでも、宇多天皇うたのころより殿上日記てんじようが記録され、これも平安時代の末まで続行されたらしい。

いったい公務の記録が、それぞれの所管で行なわれたことはいうまでもない。正倉院文書のなかにも、出雲国司庁における国

務の記録や写経所の日記など、多種の官務日記が見えるし、また近衛府の日記や検非違使の罪人糾問の日記などの存在も伝えられている。ある特定の公務や事件の経緯を記録したり調査勘問した記録にも、日記の称が与えられていたのであるが、こうした純粹に官務的な記録のみが日記ではなかった。早く、壬申の乱の経緯を、天武天皇の臣である智徳、淡海らが記録した『安斗智徳日記』『調連淡海日記』の逸文が現存しているし、日記の名称ではないが、日記的な記録である『伊吉博徳書』『難波吉士男人書』というものの一部も伝えられている。これらが公務としての記録であったのか、個人としてのそれなのかは明らかでないにしても、公的な事件や事実の記録であり、そこに私人としての感懷や思考のはいりうる余地もなかったことは疑えぬところである。なお、正倉院文書には、前記のごとき官務日記のほかに、具注曆に書き入れた日記も存している。それはある個人の所有し記録したものであるが、当時具注曆を使用した人は、官人としての身分から自由ではなく、そこに書き手の、個人としての人間を感じとることができないのはいうまでもないのである。

さて、しかしながら奈良時代から平安時代にはいるころ、明確に個人の日記というべきものの出現をみる。奈良時代のものとして『大伴宿禰佐手曆記』や吉備真備の『在唐日記』などの存在が伝えられているが、平安時代になると、慈覚大師円仁の『入唐求法巡礼行記』や智証大師円珍の『行歴抄』のごときが出現した。ことに、『巡礼行記』が、円仁の在唐約十年間に経験した仏教事情にとどまらず、遣唐使や入唐僧の動向や、唐朝の政治・経済・社会・文化の全般にわたる見聞を克明につづり、しかも全編、真摯な求道の精神がたつたぬき、高揚し緊張する文体をなしている点、明確に円仁の人間を感じさせるものがあるろう。

この時期には、なお公私さまざまな日記の名が伝えられているが、従来と異なる多くの個人日記が書かれるのは、平安時代も百年を経過した十世紀以後であるといえよう。それはこの時期に一方で官撰国史の編纂事業がとだえてしまったことと表裏の關係をなすと考えられる。国史の廢絶は、とりもなおさず律令制公権の衰退を意味するもの以外ではない。政治の運営の主体が、実質的に私的権勢家に帰していかうとする、いわば公私混交の撰関時代の到来が告げられるとき、公的な日記と異なる、私的な

「家の日記」の盛行も必然であつたといふのである。

もちろんその対象にも、形態にも、記録としての伝統があるので、あくまで公的な事件、事実が扱われるのでなければならぬ。ただ、記録主体が、純粹に公的な性格を失ひ、伝統的機制からはみだす私的個人性をかかえこまざるをえないからには、そこには、特殊独自の経験や思考が介入してくるのは当然ということになる。宇多・醍醐・村上の三代御記をはじめ、皇族、摂関大臣以下の日記を見ていくとき、その筆法にははっきりと個人色を見いだすことができるであろう。しかしながら、そのことが本来的な意味の日記、公事公務の記録という日記の原則を否定するものでないということを忘れてはなるまい。いかに筆録者の個性がにじみ出ようとも、それは日を追うて備忘録をものしたもので、日記主体の意識や目的は、自己および自己の子孫のために、いかに自分が公人として進退したか、その事実を記録するという立場からはずれてはいないであろう。公的日記はもとよりとして、個人の家記といえども、それが古代社会の公用文語である漢文体ないし準漢文体で書かれているということは、日記の特質と不可分の関係にあるといつてよいのである。日記はそのまま日記文学といわれる作品とはなりえないのである。

二 日記から日記文学へ

日記文学の発生は、漢文によつて書かれてきた記録の伝統をふりきる精神によつてささえられているといわねばならない。いうまでもなく誰しもの念頭に浮かぶのは『土佐日記』ということになろう。土佐守紀貫之が、国司の任解けて京都へ帰還する旅の日記で、承平四(九三)年十二月から翌年二月まで、その期間は五十余日であるが、それが漢文でなく仮名文で書かれているという点にまず注意しておきたい。

もっとも、仮名書きという点に限るならば、そのこと自体ではさして問題にはなるまい。すでに醍醐天皇皇后穩子の仮名日記、

『おのおのまいいざよき太后御記』が先行しているからである。この『太后御記』のまつた完き姿は伝わらず、その逸文として『かかいしやう河海抄』所引の仮名文のさ数条と『さいきやうき西宮記』に引く漢文体のさ数条があるばかりであるが、後者は原形を伝えるものでなく、やはり『河海抄』所引のかたちが正しいであろう。また逸文によるかぎりこの日記は、皇后の身邊の事実に関する備忘録にすぎぬようで、その点では伝統的な日記の規格外ではないが、そうした記録が、すでに仮名文で書かれるようになったのである。けだし皇后もそこに属する後宮は、律令政治の前殿にそむく私的世界であるといえるのであり、したがって漢字文化の規範から何ほどか自由であり得たと考えられよう。私用文字、私用の文としての仮名文字、仮名文の発達普及の温床となることができたゆえんである。皇后穩子の日記が、仮名文で書かれたことは自然のなりゆきであつたであろう。

『土佐日記』以前の仮名日記としては、もう一つ『ていじいしんかうたあわせ亭子院歌合』や『きやうごくなんすんどうかうたあわせ京極御息所歌合』などに付せられている歌合日記があり、すでに単なる事務的な記録であることを越えて、構想的にあるまじりの文章となっている。してみれば『土佐日記』の場合重要なのはこれが仮名文で書かれているということにあるのではなく、それが、ある主題をもった一個の作品であり、その方法として必然的に仮名文をえらぶほかなかったという点にあるのである。その点で、「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」と書き起こされる冒頭文に注意しなければならない。作者紀貫之は、女性筆者に自己を仮装することによって、官人貫之の立場から解放される。記録としての日記の伝統から自由な地点に転出することができたのである。だから、そこに漢文体ならぬ仮名文の記述がえらばれたということは、さきの『太后御記』や歌合日記の場合のように、女性筆者ゆえおのずから仮名文となった、そしてなお本質的には必ずしも記録としての日記の伝統のくびきから自由であつたわけではないのとは、事情がちがうのである。

もとより貫之の女筆仮託は、それが忠実に守られているわけではない。いたるところ、歴然とと土佐前司さきのぜんじ紀貫之の独自の思考を表出しているのであるが、これをもって破綻と考える必要はないであろう。女筆の擬装は、もとより擬装そのものが目的ではな

い。むしろ八方破れの擬装こそが、かえって貫之の私人的な思考情動の自由を保證する場をかたちづくるのである。

もつとも、このような『土佐日記』にも、事務や天候や行程その他、漢文体に書き改めればそのまま漢文の日次記に還元しうるような記事もあるが、そうした部面が『土佐日記』の特質を語るのではない。かえってそのような日記の形式を媒介しながら、この日記において独自の形姿を呈するものが何であるかに『土佐日記』の問題がある。萩谷朴は『土佐日記』に、(1)歌論展開、(2)社会風刺、(3)自己反照の三主題を考定しているが(久松潜一編『日本文学史(中古)』昭和四六)、氏をしてこう考えさせるこの日記は、もはや従来の記録としての日記とは異質の、複雑な一個の作品であることを容認しなければならないのである。これは要するに、作者の内部にはらまれる問題が、そこに転封せしめられていることにほかならない。しかしながら、この日記の末尾が「とまれかうまれ、とく破りてむ」と、この述作に対する否定的な一文で結ばれていることにも注意したい。もちろん反語と解すべきものであるが、しからばなぜこのような反語が用いられるのであろうか。古代名族、紀氏の一員として、官僚社会に誇り高く生きようとした貫之であり、かつ延喜歌壇の耆宿として、かつてははええしく『古今和歌集』を撰進した貫之である。しかし、そのような自己を、いまは貫徹できぬ晩年の孤独・失意、憤懣をそこにうち入れる『土佐日記』は、これが破り棄てらるべき戯文であるとの標榜を隠れ簑としてのみ、その存在理由を主張しえたのであるといえよう。伝統的規格からはずれた、無用の用であることの自覚がおのずから語られているであらうが、そのことが同時に、実用の記録と袂別し、そこに人間をかたどる日記文学の成立を宣言するものともなっているのであった。

三 女流日記文学の成立

紀貫之が『土佐日記』に託したものは、これに託するほかない、かれの内面の問題であつたけれども、それが貫之の全生活で

あるということはできない。これを限定するのがかれの土佐国から京都まで帰還の旅、五十日余という期限であり、その限りにおいても、この日記の世界はその人生の僅少な局部であるといえよう。旅中の貫之の懷ろには、古今集撰者の第一人者として、いまはなき醍醐天皇の勅を体し、任地で精撰した『新撰和歌集』が抱かれていたはずであるし、帰京しては、『土佐日記』の執筆と時を同じゅうして、多くの賀歌屏風歌の詠進にたずさわっているからである。『土佐日記』の背後には、かつて延喜初年の誇らかに高ぶる姿勢はないにしても、第一の歌人として自他ともに許される、晴れがましくなくはない貫之がいる。やがては前記の『新撰和歌集』の格調高い序文も書かれたし、また自撰家集の編集に余念なき日々もあった。かれが『土佐日記』を例の反語で結ぶ姿勢は、そうすることによってのみ、この述作に心を託しえたのであると同時に、やはり貫之の表立った生活からは逸脱する述作であるという意識をものがたっているにちがいない。

ところが、この『土佐日記』が書かれてから四十年余の後に成立した道綱母の『蜻蛉日記』(三卷)は、それを述作すること自体がかげがえのない生活であり、実人生の経験を記録するというより、その記録の作業において、一つの人生が経験された、というほどの意味をもつものであった。道綱母の事蹟については省略にしたがうが、『蜻蛉日記』にかたどられる限りでの彼女の不幸な人生をもって実人生そのものであるということはできない。むしろ第三者の眼からすれば、懇望されて兼家の妻となり、長年月兼家の顧みを受けた彼女は、余人の追隨を許さぬほど晴れがましく、しあわせな妻の座を確保しつづけていたというべきなのかもしれないのである。ことに上巻において、その印象は顕著であろう。この『蜻蛉日記』は、作者がいかにわが不幸を訴嘆しようとも、おのずから幸福の記録であり、愛の生活を立証するものとして読まれるのだという見解さえないわけではない。しかしながら、客観的にどうあろうが、そのことが問題なのではないだろう。作者にとっては、兼家との結婚生活は、そのことが身勝手であろうと、兼家に求めれば求めるほどに、裏切られていく妻の悲しみと不安と苦悩に染めあげられる無残な妻の人生史にほかならなかった。そうした妻としての不幸は、これを日記することによってしか救拔されることがないという精神の原点

から、この『蜻蛉日記』は書かれることになったのである。いいかえれば、日記を書くという行為——一つの生活によって、道綱母は書くほかにとり静めることのできないわが経験を超越しようとする。そうした営為が作品『蜻蛉日記』を生むことになったのだといえよう。

このような『蜻蛉日記』が、『土佐日記』——それが女筆を仮装するものではあるにしても——からそのまま直系につながるとはいいきれぬであろう。『蜻蛉日記』が一つの構成的な作品として書かれようとする以前に、道綱母には兼家との結婚生活の途上、はげしく相手に訴えかけ、あるいは深い吐息のようにうたいあげた歌の集積、いわば私家集的なものが先行していたと想定される。そうした私家集の形成されていく過程は、歌の詠作の、そのときどきの経験を越えて、持続的な運命のかたちをおのずから示すものになったであろう。もちろん兼家との十年余の結婚生活の経験の蓄積がついに危機的な頂点に達したとき、『蜻蛉日記』の作品化——わが人生の構成的な再現へとのり出すことになったのだが、それを支えるのが、歌の詠作の歴史であったことは注目しなければならないであろう。平安貴族女性の生活にとって和歌とは何であつたのか、ということがあらたな意義をもつて問題となるであろうが、ここでは『蜻蛉日記』の成立——女流日記文学の創始が、和歌の詠作の経験と不可分の関係にあることを指摘するにとどめておく。

ところで、なおここで触れておきたいのは、当時の貴族女性の魂をとらえていた物語である。『源氏物語』をはじめとして現存する平安時代の物語はわずかであるが、それらが今日まで伝存しえたのは、当時の物語の大群の平均的水準からは^{ざんぜん}斬然と抜きで、多かれ少なかれ特殊な作品であるがゆえに、読みすてられることなく、書写に書写が重ねられたからであるともいいうるであろう。源 ^{みなものため} 為憲の『三宝絵』(九八)の序文は、当時、物語がいかに無数に流布していたかについて「大荒木の森の草よりも繁く、有磯海の浜の真砂よりも多か」つたと述べている。為憲は、それらの物語を、木草山川鳥獸魚虫など動植物を擬人化した、いわば異類譚と、もう一つは男女の仲らいを花や蝶やとおぎなりのきれいごとを書いてゐる恋愛譚と、二類に分別しているが、

そうした物語をもつて、「女の御心をやるものなり」といつている。幼少期から成年期にかけての道綱母が、そうした物語に耽溺する日々を過ごさなかったはずはない。ことに、後世「本朝第一美人三人之内也」と系図『和歌色葉集』『尊卑分脈』に伝えられるほどの彼女は、浪漫的な恋愛譚に魂をひたらせ、美しい空想的な男女の物語にわが人生の未来図を託していなかったであろうか。彼女の姪に当たる菅原孝標女の物語への傾倒を、単にその人の夢想癖に求めることは誤りであろう。道綱母とて大差なかったと考えられる。『源氏物語』の螢巻で、「女こそ、ものうるさがらず、人にあざむかれむと生れたるものなれ。ここら（多くの物語の本をさす）の中に、まことは少なからむを、かつ知る知る、かかるすすろごとに心を移し、はかられたまひて、暑かはしき五月雨の、髪さみだれの乱るるも知らで、書きたまふよ」というのは、玉鬘たまかづの君たちが熱心に物語の本を写したり読んだりする場面におとずれた光源氏の言葉である。玉鬘は、これに対してこう言っている。「げにいつはり馴れたる人や、さまざまにさも酌みはべらむ。ただいとまことのことこそ思うたまへられけれ」と。なるほど嘘をつくのが普通になっている人は、いろいろとそのように解釈するのでしようが、わたくしども女は、物語に書かれてあることが、実際のことのように思われてなりません、というのだが、ここに女性の心が物語とどのように結びついているかが語り示されている。六条院という、架空ではあるが、この世の最高の世界においてさえ、そこに住む女性は物語を信じ、物語によって人生を教えられようとする。ましてや、上層の社交圏からはずれた受領層すりようの娘たちにおいては、狭く単調な親族圏から、はなやかな宮廷や上層社会へのあこがれや空想を、物語によって燃え立たせたのであっただろう。

道綱母が、九条殿師輔とくすけの三男という貴公子の求婚にあい、歌の贈答をかわしあったころは、物語によってつちかわれた夢が正夢であつたことを疑わなかったかもしれない。が、その後に経験する結婚生活は、物語の世界とは異なる、そして物語世界を拒否する現実の男女関係である。この現実の経験の進行による彼女のなかの物語的世界像の破碎という契機なくして、日記への意思は起こりえなかったであろう。『蜻蛉日記』の冒頭に、「ただ臥ふし起き明かし暮らすまに、世の中におほかる古物語ふるものがたりのはしな

どを見れば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ、天下の人の品高きやと、問はむ例にもせよかしとおぼゆるも……」と語るのは、物語世界を、自己の精神と肉体の領域から排除する作業としての日記の自覚を明示するものであるといえよう。『蜻蛉日記』という作品の成立を考えると、物語とのかかわりを重視しなければならぬのである。いわば、物語——道綱母は古物語という——は、道綱母の経験を媒介として日記文学を新生させたことになるし、なおいえば、身の上の物語として、新しい物語が誕生したことになるのである。そうした女流日記文学の開始なくしては、『源氏物語』や『枕草子』を成立させる文学史的胎盤も形成されなかつたにちがいない。

さて、それはともかくとして、日記文学を一つの文学ジャンルとしてとらえるとき、そこにはおのずからいくつかの特質が数えあげられるであろう。またそれぞれの作品を見ても、素材としての実人生経験は、作者によってさまざまであるから、したがって日記の性格もさまざまなものとなる。本集に収める『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』などの諸作品のそれぞれが、いかに特異であり個性的であるか、実感されるところである。にもかかわらず、これらを日記文学として一括的にとらえるのは、一に日記が単なる記録ではなく、作者がかけがえなきわが生のあかしを、そこにつむぎだす持続的な行為の場であるということである。それを不用意に自己告白録であるとか、またいわゆる私小説とか説明することでは当を失する。実人生経験に抛りつつも、その実人生の経験からの要請として、そこに自己自身を転移して生きる営為であるということができる。『蜻蛉日記』によつてはじめられた、女流日記文学の方法的特質が、いかに多様に受け継がれるかは、以下各作品の校注・訳担当者によつて説かれる各章にゆずることにする。

和泉式部日記

藤岡忠美

一 和泉式部日記の特性

奔放な生き方と情熱的な和歌とによって知られる女流歌人和泉式部と、冷泉院れいぜいゐんの第四皇子という高貴な身分の敦道親王あちのみちとの恋は、世間の非難がましい好奇心をあつめて、広く知られるところのものであった。二人の恋は長保五（一〇三三）年四月にはじまり、親王の没する寛弘四（一〇四二）年十月まで、およそ四年半にわたつてつづいたが、その満一年目にあたる寛弘元年四月の賀茂祭には、二人は一つ車に相乗りして見物に出かけ、人々は行列はそちのけでこの車に注目したと『大鏡』にしている。このときすでに、はなやかな噂うわさとして世間にとりざたされた、二人の關係の熱烈さが知られるのである。

『和泉式部日記』は、こうした二人の恋愛の、複雑に揺れ動きつつ進展してゆく過程を記したものである。とはいえ、この日記で扱っているのは、世をはばからぬ愛のたかまりにおける二人の姿ではない。二人の恋の初期にあたる足かけ十か月のこと、長保五年四月の二人の出会いからはじまって、その十二月十八日について和泉が宮の邸に移り住み、翌寛弘元年正月に、宮の妃が憤然と邸を出て行くにいたる、いまだ人目を忍ぶ恋の期間が主に扱われている。そこに描かれているものは、宮の求愛と和泉のためらいから出発して、わが運命の不安に悩む女の心と、多情な相手への疑惑がつきまとう宮の心とがあきることなく反復して交錯し、しかししだいにやむにやまれぬ恋のたかまりに上昇して、周囲への思惑を捨て、公然と二人の仲を示すことによって挑戦的にさえなつてゆくこうとする、まさに二人の恋愛の初期の一区切れまでの過程である。二人の複雑に揺れ動く恋愛心理の、相